

- ① 所属名：医療法人 仁泉会 川崎こころ病院（かわさきこころびょういん）
- ② 協会会員番号：5785
- ③ 氏名：佐々木俊二（ささきしゅんじ）
- ④ 所属県士会：宮城県作業療法士会
- ⑤ タイトル：私の体験した東日本大震災：その2
- ⑥ 本文：

電気が回復するまでの1週間、その後のガソリンが入手ができなかった約2週間、私は病院に泊まり込んで災害対応を行いました。病棟では、主に夜間のスタッフが少ない時間帯に余震による避難やトラブルが発生し、人手が必要でした。リハビリ職員は、夜間の病棟応援を中心に手伝いました。そのため、日中から翌朝まで病棟に連続勤務することも多々ありました。私は、各病棟の実情に応じ、支援ができるように職員を配置し、リハビリ職員が連続勤務で倒れないよう各病棟に配慮しながら調整しました。私自身も、朝晩の食事時間の手伝いと夜間の病棟応援に入りました。また、泊まり込みのリハビリ職員の寝場所の確保や物資の買い出しも行いました。このときは、数年前からの山形在住の経験が役立ち、山形市までに物資調達に通いました。しかし、被害の少なかった山形市も、必要な物資がなかなか手に入らず、蠟燭を探し求めて葬儀屋まで行きました。そこでは、図らずも親切に対応して頂き、飲料水まで分けて下さいました。精肉店では、次は入荷がわからないにも関わらず、豚肉を全て切り分けて頂きました。山形の人たちの暖かさに心から感動しました。

日々そうした対応に追われつつ、災害時のリハビリ職員の取るべき対応は何か？他の医療施設ではどうしているのか？何度も自問自答しました。私は、このような非常事態でも、対象者が自力で食事できるよう対応したり、落ち着かない方に安心してもらうため話し相手をしたり、リハビリ視点で関わっている自分がいました。回復期リハビリテーション病棟では、震災後5日目より、病棟の手伝いの合間を見ながら、廃用症候群予防のためリハビリをスタートさせました。

このような非日常的な事態時では、普段と違う人間性が垣間見られました。病院の批判ばかりを繰り返す職員、余震があるたびに自分だけ屋外に退避する役職者、福島第一原発の放射能漏れに過敏に反応し、あおりたてる人などもいました。当院でも沿岸部で被災された方々を受け入れていますが、協力を拒む職員なども…。しかし、夜間に蠟燭の明かりの中で、少ない食糧を分け合って食べたり、スタッフの家族の安否を気遣ったり、被災情報を交換し合ったり、新たな関係の深まりもありました。リハビリ職員も、災害時対応の課題を話し合ったり、さらにこれまでの体制の問題点を検討しあったりチームワークを高められるきっかけとなりました。（次に続く）